

## H・ヘッセ

## 『ペーター・カーメンツィント』について

— 幾つかの断面 — (I)

磯 弘 治

1899年、ヘッセは処女詩集「ロマン的小曲集」と散文集「真夜中過ぎのひと時」を刊行した。22歳の慎ましい気負いは刊行後の一年間で、どちらも50部ほどの反響をえたにすぎなかった。それでもこの胎動は「畏れと暗い祈りの声の敬虔さに充ちた作品<sup>(1)</sup>…」とするR・リルケの評をもたらしものではあった。そしてベルリンの出版家S・フィッシャーがヘッセに最初の文学上の承認と激励をあたえる契機を「ヘルマン・ラウシャーの遺稿と詩」(1901年)がはこんでくる。

フィッシャーが「…決して平凡ではない希望が結び合わされている<sup>(2)</sup>…」と評する詩文集「ラウシャー」だが、現実を回避し幻想に浸る気分が色濃い、ヘッセ自身は「このなかでわたしは匿名をつかって、その当時、危機に瀕していた若者の夢を清算したのです。…死んだことにしたラウシャーを通して、わたしにはもう用済みの自分自身の夢を納棺し、埋葬しようと思ったの

---

テキストは Hermann Hesse Gesammelte Werke in zwölf Bänden. Bd. 1. Suhrkamp Verlag, Frankfurt a.M. 1970. 「Peter Camenzind」の引用はページ数を本文中に記した。なお、訳文については「青春彷徨」(関泰祐訳) 岩波文庫を参考にさせて戴いた。

(1) Siegfried Unseld : Hermann Hesse Werk und Wirkungsgeschichte. Suhrkamp Verlag Frankfurt a.M. 1985 S. 13.

(2) Siegfried Unseld : a. a.O., S. 19.

です」<sup>(3)</sup> (1907年版序文)と述べている。マウルブロン神学校からの逃走にはじまり、テュービンゲンそしてバーゼルの書店員におさまるまでの自らが迎った曲折に対する終止符のつもりか。H・バルは「ラウシャー」は「一時しのぎに抑えつけた揺れ動く心の余韻だ」<sup>(4)</sup>としている。

1901年3月から5月にかけてのイタリア旅行、ミラノ、ジェノバ、フローレンスなどを巡る旅の後あたりからすでに、ヘッセは「ペーター・カーメンツィント」の稿を起しており、1903年4月の二度目のイタリア旅行を挿んで5月に脱稿した。このヘッセ最初の長編小説は Neue Rundschau に掲載された後、1904年に刊行されると瞬く間に版を重ねる<sup>(5)</sup>。魔術師に憧れ、13歳で「詩人になる」と思い定めていたディレタントに思い掛けず、「詩人」という栄えある洗礼名が授けられる扉が開かれた。

# 1

アルプスの農夫の息子ペーター・カーメンツィントは村を離れ、ギムナジウムそして大学で学び友情と恋に出逢う。やがて文筆を生業とするようになるかれは、都会での放将な暮しに疲れたり、純朴な田園での牧歌的日常と聖フランチェスコの愛の思想に癒され励まされしながら異郷を漂い続けるが、結局は老いた父のため故郷の僻村に帰ってくる。この詩人を夢みたペー

(3) H. Hesse : G. W. 11. S. 20ff なお、ヘッセはフィッジャーに、「自分の作品は個人的な出来事を今日の姿で述べる試みに過ぎず、おそらく著しい成果をもたらす書物に相応しいものではありません…わたしが書くのは、もっぱら自分自身の欲求からなのです」としながらも「ささやかな散文」を送る約束をしている。(1903年2月2日)

(4) Hugo Ball : Hermann Hesse. Sein Leben und sein Werk. Suhrkamp Verlag, Frankfurt a. M. 1972. S. 103.

(5) Hermann Hesse 1877・1977 Stationen seines Lebens, des Werkes und seiner Wirkung. Sonderausstellung des Schiller-Nationalmuseums. Herausgegeben von Bernhard Zeller. Katalog Nr. 28, S. 103.

ターの半生が自叙伝風に綴られる。ライフワークの草稿が抽斗にあるものの、どうやら村の飲み屋の亭主におさまることで人生の決着がつきそうな男の回顧という体裁である。

ペーターの故郷はアルプスの峰々に覆われたニミコン村という。物語は「はじめに神話があった。大いなる神がインド，ギリシャ，ゲルマンの人びとの魂の裡で詩作とその表現に努めたように，神はすべてのこどもの魂の裡にも日々詩を創る」(S. 343) ではじまり，しばらくはアルプスの自然の描写がつづく。漫然と幾つか情景を切り取ってみる。

「わたしのあわれであどけない魂は，虚ろでそっと待っていたので，湖や山々の精霊が美しく奔放な行いをわたしの魂に書き綴った」(S. 343)

「樹木がわたしには山々と血縁の濃い世捨人や戦士のように思えた。…どの樹木も風や天気や岩との存亡と生育を賭け，じっと弛むことなく戦っていたからだ。樹木はわたしを歴戦の兵士のように視つめ，わたしのところに畏れをそして崇敬を喚び起した」(S. 344ff)

「少年らしい勇猛さが育つにつれ，わたしは反逆者，永遠の青年，ふてぶてしい戦士そして春をもたらすもの南風を愛した…南風が生命と溢れる豊さそして希望を迸らせて猛々しい戦さを開始する，吹きすさび，高笑い，呻き声をあげて…南風が唸りをあげ深い谷間を吹き抜ける…」(S. 350)

運行する自然のひとつひとつの相貌が，其処を故郷とする質朴な少年の耳に，人間の唇にのぼったことのない神の言葉を語りかけるといふ。山や谷，樹や岩のそれぞれが生きたところを内包し，それぞれが異なる表情と神秘を具えた生きものである。この自然と向き合うペーターの姿勢は，対象へのアニミズムめいた観察の仕方と謙虚な敬意，汎神論ふうな観念的了解であろう。

雲、嵐、稲妻などは父なる神の象徴であり、創造、律法、衝突の観念につながる、また無条件にペーターを抱き込む大地としての自然は母なる神ともなる。<sup>(6)</sup> 自然の裡にあってペーターの世界と自身についての意識は臍げであり、自然という宇宙に包容されながら、一体感と帰属感到に充されてペーターはまだ微睡んでいる。綴られた自然は客観的な描写の対象では全くない、ペーターは「精緻で即物的な観察者ではないし、A・シュティフターのように絵画的に自然を描く者でもない」「白昼夢にあらわれた光景としての自然…抒情的な気分が漂う不明瞭さのうねりのなかにある自然」<sup>(7)</sup> これはペーターが散文で綴る賛歌である。

神話の世界の雰囲気はその風土と無関係ではない、ギリシャ神話の牧歌的雰囲気にはギリシャの風土が不可欠であろう。<sup>(8)</sup> ペーターのところに映された神話は、ギリシャのオリンポスの神々のように明るく華々しいものではない。ニミコンの自然は神々とデーモン、精霊と巨人の棲処である。アルプスの雪溶けの奔流が巨大な岩を押し流す、「…ぞっとするような早春の夜、烈しい南風が年たけた頂で咆哮し、そして急流が粗い岩を切り立つ山肌から剥取るとき」(S. 344) ペーターは「広いマントを着け、広い縁のある帽子を被り、ときには白馬に、ときには黒馬にまたがって、世にも奇妙な鳥獣を追いかけて、大空を翔る」<sup>(9)</sup> 夜の嵐の神ウォーターンを視るにちがいない。アルプスの山々が嵐と戦う、「傷つく度に山々は憤怒と恐怖を身の毛もよ立つほどに轟ろかせる。そしてそのものすごい呻きは屈折し努り遙かな山津波となって反響する」(S. 344) すると、ペーターの裡でそれは神々と闘う巨人に変容する。山肌の深い抉れはその傷口であり、敗走する巨人は雷を投げる。自然のアニ

(6) 松本 滋『父性的宗教、母性的宗教』東京大学出版会、1987年刊、89頁～93頁参照。

(7) F. Böttger : a. a. O., S. 102ff.

(8) 藤縄謙三『ギリシャ神話の世界観』新潮社、1974年刊、56頁。

(9) E・トンスラ、G・ロート、F・ギラン『ゲルマン、ケルトの神話』清水茂訳、みすず書房、1975年、22頁。

ミズムの、汎神論的擬人化は、自分をとりまく事象や事物とそれが織り成す世界を歴史的、宗教的、宇宙論的な意味を持つ対象として把握しようとする人間の原初的、無意識的欲求であるようだ。ただ、アルプスの垂直にそそり立つ絶壁、複雑に切れ込み、抉られ、裂けた峡谷、奇異なほどに不揃いに鋭鋭な稜線は凄愴で峻厳なたたずまいをみせ、ペーターの生命感情に神聖さと崇高を教え、そして神秘と畏怖を殊更かきたて、ペーターの魂の神話を特徴づけたはずだ。

○・F・ボルノーは世紀末のドイツ文学について、ホフマンスタール、リルケとならんでヘッセも挙げて、かれらが後にはそれぞれ別の道を辿りはするが、「すくなくとも青年期では生の神秘主義の基盤がすべてを貫いている…すでに、Sturm und Drang の特徴である汎神論的基調、すなわち、すべてを司る宇宙的な生による志向」がみられると指摘する<sup>(10)</sup>。ペーターにとって自然は巨大で一切を包摂する生命体であり、かれもそれに抱かれる一つの生命だと感じている。かれが自然に向けてその主観的心象を重ねあわせるとき、かれはより大きな生命に融けこむ、すると、自然の相貌はペーターの魂の奥底のうごめきを映し、かれは自然との一体感に酔う。「はじめにあった神話」は「自然ではなくて、自然によって産み出されたエモーションであり、このエモーションがペーターを倅せな気分<sup>(11)</sup>に浸らせる」のである。ペーターの視線が未だ世間という人間世界に向けられないとき、かれが対峙するアルプスの生命性が色濃い自然は、ペーターに最初の実存的関係をもたらし対象となる。ただ、周囲の世界を体験する仕方が、その感性にとって世界と自分が未分化であるだけまだ幼い。

(10) オット・フリードリヒ・ボルノー『生の哲学』戸田春夫訳、玉川大学出版部、1975年刊、26頁。

(11) F. Böttger : a. a. O., S. 104.

## 2

H・バルは小説『カーメンツィント』は自分の故郷を創ろうとする詩人の懸命な模索だと解している。<sup>64</sup>しかし、新な故郷へのヘッセの希求は「19世紀の自然感情を再現させてはいるが、それは自然との帰一に源を発するのではなく、むしろ自然への憧憬が産むのである。この自然感情は…ただ都会に在って自然に関して詩に溢れたロマンティックな外観しか知らない夢想家の心に生まれるものだ」と極付けかねられないペーターの語り口ではある。それでも、バルやB・ツェラーによれば、ヘッセが設定している山々の景観、「つまり原印象と原感情の未踏で強大な未だ哲学には到らない世界、大きくゆったりしたそして悲壮に流動する世界、風に舞う粉雪の美しさ、動かずじっとしているキマイラの世界、この山の景観とヘッセは親密であった」<sup>64</sup>、ヘッセはバーゼルに移ると、スイス各地を旅し、とりわけ Vierwaldstätter See の周辺を巡り歩き、この原初の世界に棲家をもとめたようだ。<sup>65</sup>

新な故郷への希望と決意に仮託された家郷を疎む想い、遺棄される故郷 Calw の負の要素とは何か。故郷が宿すイメージは環境としての自然、街並と家々のたたずまい、そして最も濃い血縁としての両親の家であろう。「ヘルマン・ラウシャー」には父母の世界の正の側面が際立っており、殊に「幼年時代」には慈愛と恵みに溢れた、無条件の包容力と寛容を具えた母親像が刻まれていた。しかし、両親の世界との相克はマウルブロン神学校退学時、既に芽吹きはじめていた。当時、父母に宛てたヘッセの手紙には、父母

(12) H. Ball : a. a. O., S. 99ff.

(13) F. Böttger : a. a. O., S. 104.

(14) H. Ball : a. a. O., S. 101ff. ヘッセが親しんだ山々は Pilatus (2132 m) Bürgenstock (1132m), Rigi (1797m) などのようである。

(15) Bernhard Zeller : Hermann Hesse in Selbstzeugnissen und Bilddokumenten. (Rowohlts monographien 85) Rowohlt Taschenbuch Verlag, Reinbeck bei Hamburg, 1972, S. 43.

の理解を得られない「ニヒリスト」「流刑者」「四人」などの署名が書かれ、自分を「…世間を憎む者、両親が生きているみなし児」に擬らえたりもしている。<sup>(10)</sup>

バルは、母マリーが「ラウジャー」で綴られたように「詩を愛し、美しく感激した声でバラードを歌い、アイヒェンドルフを愛する物語の名手なのだが、かの女が心の底で愛しているのは詩篇の詩と賛美歌<sup>うた</sup>だけであつたと、そしてこの母の信仰の熱情には何人といえど手を触れたり足を踏み入れることのできない領域がある」と述べている。かの女の愛は「神に関する神の為の愛であつて」人間への愛ではなかった、こどもは神の創造物として愛されるというのだ。そこには偶像的なもの、情緒的で感覚的なものを寄せつけず、限らない神への、ほとんど狂信的な帰依に生きる母の頑な生があつた。

人間が「神の恩恵の助けを 借り、意志の 内的浄化という 特別な行為を経て、いわば、新しく生まれかわれる」と考え、そして「従来の空虚で形式主義的な宗教と異なった感情ある宗教への憧れから敬虔主義と呼ばれた」宗教的態度と信仰の実践は、やがてその過度の自己内省が妄想と自己欺瞞<sup>(11)</sup>そして偽善を信仰者のこころに産み落とすアイロニカルな側面もあつた。ヘッセの眼に映るカルフの家は掟としての聖書が第一義に遵守されねばならない場であり、当為を礎石とし禁令を柱とする「小市民的敬虔主義者」の家であつた。ここでは自然法としての父母性は実定法としてのキリストへの熱情と拮

(10) Kindheit und Jugend vor Neunzehnhundert. Hermann Hesse in Briefen und Lebenszeugnissen 1877-1895., Suhrkamp Verlag. Frankfurt a. M. 1973, S. 250, S. 253, S. 268ff.

(11) H. Ball : a. a. O., S. 66.

(12) マックス・フォン・バーン『ドイツ十八世紀の文化と社会』飯塚信雄他訳 三修社、1984年刊 192頁。194頁-196頁参照。バルは母マリーが『経験世界のなかで、冷静なあの世への日記を記す』と述べているが、それも、敬虔主義者にとって重要な内省の手段であつた。ヘッセの姉 Adele がまとめたマリーの手紙と日記には、祖父グンデルトとの軋轢、家長として自由に振る舞えない父ヨハネスの苛立ち、カルフ出版協会での暮しに耐え難さを覚えるマリーの姿が窺える。

抗しえない、両親の慈愛は祈りと教えへの促し、罪と赦しの確認である。寛容は許容と同義ではなく、骨肉血縁の凭れかかりは聞き届けられない。やさしい眼差しは恩寵にはかならず、いたずらに請願を強いる。バルはこの「小市民的敬虔主義」の環境にこそ、ヘッセの「もっとも重大な葛藤の根がある」<sup>(19)</sup>としている。

新しい故郷アルプスの峰にペーターが登る、山頂はヘッセが遠ざかったその故郷の全体を客観視できる地点でもある。かれが見下すのは斜面にしがみついた小さな村ニミコンである。この村に生きる人びとの日常は殆ど描かれることはなく、ペーター・カーメンツィント家の営みも具体的な情景としては浮ばない。ただ、ニミコンでは村人の多くが、「長い冬、もろもろの危険、辛い耐乏生活そして世間の暮しから隔離しているせいで、絶えず幾らか憂うつな心持ちである」(S. 359)という。そして、ペーター父子の奇妙な儀式がニミコンの日常を象徴している。二三週間ごとに父は息子を乾草置場でさんざんに打ち据える。こどもは「ネーメジス(復讐の女神)の供物台に置かれた捧げ物」であり、父の叱責の言葉も息子の悲鳴もなく、「神秘的な力へのあたりまえの貢ぎ物として」(S. 353) ペーターは身動きせずに踞っている。

村の日常は創造の流れを溜めた澱みのようである、澱みを泳ぐ人びとの営みはどこか気怠い。それは人間の裡にある生命の自己表出が遮られ、健康な生が少しずつ削りとられた姿に似ている。ボルノーは「心の基盤としての気分」をハイデッガーの洞察を纏めながら、「気分とは必然的な不可欠な構成要素として人間の根源的な本質に属している。…常に現存する気分の層は、その他の精神生活の全部が展開する基盤であり、それによって精神生活がその本質において徹底的に規定されているのである」と定義づけている。<sup>(20)</sup> 緑の牧場と湖のニミコンの牧歌的なたたずまい、しかしそこに住む人びとの憂うつは、ヘッセが慕わしさと息苦しさのアンビヴァレンツに裂かれる

(19) H. Ball : a. a. O., S. 20.

(20) O. F. ボルノウ『気分の本質』藤縄千艸訳、筑摩書房、1985年刊、37頁。



「小市民的敬虔主義」の故郷がもつ陽画と陰画である。

ヘッセがバーゼルに移った頃、夢中になったニーチェも、やはりプロテスタントの牧師の息子であり、同様にその母も牧師の娘で極めて敬虔な信仰者である。ニーチェは「…プロテスタンティズム的な生活のなかで自己自身の内面の欲求、自己の内部の自然に対してきわめて不自然な関係をもつことになり、そこに抑圧の構造が発生する」と批判する<sup>(21)</sup>。「禁欲と勤勉と秩序、またそれらにもとづいた表面的には穏やかで落ちついた、そしてどこか田舎臭い素朴な明るさ——そうしたプロテスタントの家庭の理想を最もよく体现しているのが、いや体现せねばならなかったのが牧師館であった<sup>(22)</sup>」というニーチェを育くんだ牧師館は、そのままヘッセの両親の世界である。「ラウシャー」の慎しく、清廉な家庭の団欒、父母の聡明で誠実な立居振舞も敬虔主義的精神の実践が孕む欺瞞の糊塗に視えてくる。「ラウシャー」では正の側面ではあるが、少くとも等身大に描かれた両親だった、それが「ペーター・カーメンツイント」では描き方がそっけないものになっている。ペーターの父と母は顔立、軀つき、性質が簡単に紹介されるが、ヘッセの父ヨハネス、母マリーを偲ばせる横顔はない。ペーターは「母親からは僅ばかりの世才と信仰心、静かで口数の少い気質を、父親からは反対に、揺がぬ決心への恐れ、金銭管理の能力の無さ、あれこれ考えながら大酒を飲むこと…眼と口を父に、母からは力強く堅牢な歩き方と体格そして強靱な筋力を」(S. 359) 授かっている。このひどくデフォルメされた設定は、血縁という最初のエロスの対象との関係の跡切れ、更に積極的切断を想わせる。敬虔主義的世界の解体は『「カーメンツイント」』とともにテーマが変り、健全さがはじまること」を示すものであり、「『ラウシャーが愛書家の習作のエコーならば、『カーメンツイント』は生命への、別の重要な本質への一步<sup>(23)</sup>」ということになる。デフォルメは両親像ばかりではない、17歳のヘッセはギムナジウムでの勉学を断念せざるを

(21) 三島憲一『ニーチェ』(岩波新書 361) 1988 年刊, 21頁。

(22) 三島憲一, 前掲書, 20頁。

(23) H. Ball : a. a. O., S. 103.

えず、時計工場の見習工となったが、17歳のギムナジウム生徒ペーターは青春の力が身体中に横溢し、レスリング、テニス、競走、ボートと肉体を躍動させ、汗を満喫する。生きられなかった我が半身への追慕であろうが、少年のヘッセにこのようなスポーツはおよそ縁がなかった。「無器用な羞恥心と軽やかな身のこなしに欠け、ダンスや気軽な雑談、お辞儀もできない。しぐさのどれもが百ポンドの重りを付けたぎこちなさで、シュヴァーベンの世間知らずがかれに絡み付き」とバルはヘッセにもたらされた故郷 Calw からの「小さな町の贈り物」を示唆している。

物語の進展を見ない時点で、ペーターの母が亡くなるが、これはヘッセの伝記的側面と重なる事柄でもある。母マリーは「カーメンツィント」執筆途中で亡くなっている。母の不在設定はデフォルメした父母像と自画像、そしてペーターの眼の奥に微かな憂うつを潜ませて映る故郷の牧歌的日常のたえずまいとともに、人間の成長過程の一局面としてペーターが克服しなければならぬ分離不安の構図であり、それはそのままヘッセが「バーゼルで大事に育てはじめた生きることへの新たな態度決定の最初の段階」でもある。広い世界に隔絶したニミコン村の人びとが向ける彼方への視線は蒼空を高く咬む稜線に遮られる。稜線はかれらの希望を十全に膨らませないまま萎ませてきたはずだ。祈りや願いはもっとも広い視界を求めて垂直に延ばされる、それはペーターが牧場に寝ころぶ姿勢でもある。アルプスの稜線には幾人ものペーターの老いた希望と憧憬の残骸がよこたわっているのかもしれない。

### 3

1871年プロイセンのウィルヘルム一世はドイツ皇帝たるを宣言する。新しい帝国であるが、ここに到るまでにドイツは「農民の国を労働者、事務員の

②4 H. Ball : a. a. O., S. 93.

②5 Joseph Mileck : Hermann Hesse. Dichter, Sucher, Bekenner, C. Bertelsmann Verlag, 1979, S. 35.

国に変えた大きな変革を経ていた。1830年当時のドイツでは人口の5分の4は農村に住み農業で生計を立てていたが…1895年にはやっと5分の1強という状態<sup>(26)</sup>であった。国内に深刻な不況をもたらした経済恐慌(1873年)に続いて、1877年農業恐怖が更に追い打ちをかけた。ユンカーや大土地所有者層は1893年「農業家連盟」を結び、以後この団体は経済政策、関税政策に対抗する保守的勢力の一翼を担うことになる。このような社会的政治的状况を背景にして、「ドイツ種族とその風土がもつ郷土文化を見直す運動<sup>(27)</sup>」が興ってくる。ヘッセが後に熱心に協力する「ライン地方・ドイツ様式と芸術のための月刊誌」をW・シェーファーが1900年10月に刊行、「車輪の下」(1906年)を見本掲載する「芸術守護者」は既に1887年10月、F・アヴェナリウスによって刊行されている。この「芸術守護者」は青年層に多大な影響を与えた雑誌であり、創刊にはニーチェも関ったようで、世紀末の文学・芸術を席捲している文芸的雑文趣味を批判し、「純潔な本源性」を旗印に「ドイツ様式の純粋性」を擁護した。「民族学と自然が重要視され、シュテファン・ゲオルゲ、フーゴー・フォン・ホフマンスタールそしてドイツロマン派が」殊に宣伝された。このような郷土文化を見直す運動のなかから生まれた農村的、農業的、民族主義的色彩の濃い「郷土文学」は「大都市文学、経済主義化され、批判的に議論を進める近代の文学に対抗して、農村的、小都市的、小市民的なルサンチマンの声を代弁していた」ようだ<sup>(28)</sup>。

(26) ゴーロ・マン『近代ドイツ史』上原和夫訳、みすず書房、1986年刊、268頁-270頁。

(27) F. Böttger : a. a. O., S. 96 郷土の風土、風俗文化財の保護運動、あるいは、学校に於ける郷土研究の育成が奨励され、またこの動きにはワンダーフォーゲルの理想にも合致するところがあった。

(28) クラウス・ヴァーゲンバッハ『若き日のカフカ』中野孝次／高次知義共訳、竹内書店、1969年刊、97頁-98頁。／『フランツ・カフカ』塚越敏訳(ロロロ伝記叢書)理想社、1967年刊、96頁。

(29) 上山安敏『神話と科学』岩波書店1984年刊、92頁。郷土文学のベストセラー『教育者としてのレンブラント』の著者ラングベーンだが、永上英廣氏によれば、イエナで老いた母の看護を受けていたニーチェを治すと称した人物で、ニーチェの知的な話相手になりはしたものの、どうも山師的なところがあったようだ。また、センノ

迫りつつある資本主義、工業化の影響が農業経営にとくに著しく具体的に現われるなかで、政治的社会的な圧力団体である「大土地所有層が管理支配する網の目から漏れる農民がドイツの工業化に不快感を覚える人びとにとって偶像的人物像」となる。そして「農業恐怖と農業全般にわたる衰退の真の原因が明らかにされるかわりに、田園生活の偽りの神話化と内面化によって人間の保守的傾向が支持され antiburgeöse の感情が呼び起こされる。<sup>(80)</sup>」

農夫の息子の物語、小説『ペーター・カーメンツィント』は発売されるや二週間で初版が売り切れた。「アルタナティーフとして、個たる人間の均一化に対する抵抗として」<sup>(81)</sup>受けとめられたのである。ヘッセ自身、都会を離れて田園に向う時流に幾かは動かされていた。自分を農民ではなく、むしろ遊牧と狩猟の民、定住と群生を厭う人間に数えながらも「《農民―遊牧民》という対比のかわりに、わたしはあの頃は《農民―都会人》の対比を表わし、農民であることを単に都市からの隔たりだけでなく、とりわけ、理性的原理原則ではなく本能に方向づけられた生活を際立たせる自然との近しさ、そして安穩さと解していた」<sup>(82)</sup>と回想している。

## 4

ギムナジウムを卒業したペーターは、かれにとって最初の大都市チューーヒッヒで学ぶ。ヘッセの以後の作品でも現われる、全くその資質と性格を異にする友との友情がペーターの青春の思い出を刻む。「青春が美しい青年に姿を変て僕の方へ歩み寄ってきた」(S. 380) 強情でごちなく、頑強だがしな

＼ セッションを起したその作品にも、随分と見当違いな考察が見受けられるとのことだ。(『ニーチェとその母』現代思想、臨時増刊号、総特集ニーチェ、21頁。)

(80) F. Böttger : a. a. O., S. 97.

(81) Hermann Hesse Sein Leben in Bildern und Texten. Herausgegeben von Volker Michers. Suhrkamp Verlag Frankfurt a. M., 1979, S. 80.

(82) Hermann Hesse : Beim Einzug in ein neues Haus. G. W. Bd. 10, S. 144.

やかさのない田舎者ペーターとは正反対のリヒャルトである。快活で洗練された物腰、裕福で如才なく、聡明で世事にも明るい歳上の青年がペーターの青春を伴走するのである。ペーターはワーグナーもニーチェも知らず、せいぜいヨーデルができるだけだ、しかしその無知と純朴ぶりをリヒャルトは誉めそやす。「あなたは全く解っていないのです、あなたがどれ程妬ましいくらい汚れない人間であるのを、そして、そんな人間がいかに少いかを」(S. 383) 無垢で無邪気な存在への偏りが著しい。

「この二人の若い男性の関係には明かに同性愛的な色調が潜んでいる」とするツィオルコウスキーは「この関係は一方が、確な自覚と自主性を強く求める導き手で、他方はなるほど才能に恵まれているものの脆弱な性の人物で、とかく後をつき従い、そしてその友によってこどもらしい無邪気さから引き離される<sup>(63)</sup>」と述べ、このような友情関係をヘッセの作品全体の原型とみなしている。確かに二人の友情は相互に独立した主体の出会いと交流ではない。確固とした自己のアイデンティティーを握みきれないペーターは自己主張を躊躇する。ためらいは相互の人格的衝突への怯えであり、ペーターは常にリヒャルトとの妥協と譲歩の隙間を見つけて、見せかけの類似を喜ぼうとする。リヒャルトへの想いは、かれの人格を自分の裡に吸収する、あるいはそのなかにペーター自身が溶解することで、自分の個性なり人格の拡充をめざす内的促しだろう。ペーターにとってリヒャルトは他の人間との友誼を避けるほどかけがえのない存在、かれの女友達との親交にも疎しさと嫉妬を覚える眩さである。

「プロテスタントの 厳しい宗教倫理につつまれたドイツ人にとって 南は、エロス、母なる地、若い男性（同性愛）のイメージがある<sup>(64)</sup>」ようだが、ペー

<sup>(63)</sup> Theodore Ziolkowski : Der Schriftsteller Hermann Hess. Wertung und Neubewertung. Deutsch von Ursula Michels-Wenz. Suhrkamp Verlag Frankfurt a. M. 1979, S. 32.

<sup>(64)</sup> 上山安敏『ヘッセとモンテヴェルタ』『ユリイカ』特集ヘッセ、青土社、1982年刊、157頁。

ターとリヒャルトも青春の終幕をイタリアへの旅で飾る。

この時期、ニーチェとともにJ・ブルクハルトとその著作がヘッセを酔わせた。世紀末以後、イタリアルネッサンスへの憧憬と讃美は時代の潮流でもある。ブルクハルトの「イタリアに於けるルネッサンスの文化」(1860年)も多大な影響を与えた。「…ルネッサンスと共に人間は自己自身を発見し個人となった。千年間の桎梏が破碎され、自己実現が目標となり、世界と人間の新しい価値付けが時代の問題となる」それがルネッサンス期であり、ブルクハルトにとってルネッサンスは「…人間的意識や生活の深く広い更新であり、寧ろ新生である。あらゆる既成の見解から独立して物や社会を眺め、新しい積極的な精神に於いて発見し考察する」ことに努める運動であった。

親しみのある人間的で馬鹿らしくもあるミラノの大聖堂、ジェノヴァの海と水平線、絵と夢で見知っていたとおりのフィレンツェ、更にウンブリアの旅の軌跡が「ツーリスト用の詳細な案内書」のように綴られ、ペーターは「15世紀ルネッサンスの生活 (Quattrocento)」(S. 414)に想いを馳せ、「神の吟遊詩人フランチェスコ」(S. 414)を偲ぶ、そして「現代文化がもつ全くのくだらない馬鹿馬鹿しさ」を感じる。「我々の社会では永遠に異邦人である」(S. 415)予感を抱きながらペーターはイタリアの「率直でありのままの生活」(S. 415)に安堵し、その営みの裡にある「古典文化と歴史の伝統」(S. 415)を楽しむ。これらはヘッセ自身の旅行記、見聞録であり、自照と内省を重ねる移動の行為は現代文明の象徴としての大都市への遠慮がちな揶揄でもある。

イタリア旅行の終え、ペーターと別れ帰郷するリヒャルトは「南ドイツの滑稽なほど小さな川」(S. 416)で溺死する。リヒャルトと比べて「おおよそ

65 下村寅太郎『ブルクハルトの世界』岩波書店、1984年刊、226頁、227頁。なお、Zeller a. a. O., S. 41, Mileck a. a. O., S. 35, Claudia Krstedt: Die Entwicklung des Frauenbildes bei Hermann Hesse, Peter Lang 1983, S. 133. など、しばしばニーチェ、ブルクハルト、バハオーフェンらが、当時のヘッセにもっとも強い影響を与えたと指摘されている。

66 Joseph Mileck: a. a. O., S. 36.

人間がこどもの頃から、殊に慕わしいものでも欠くべからざる」(S. 404) 存在でもなかったというペーターに欠ける属性は、共生を前提とする現実の人間社会、あるいはそこでの組織化され、制度化された共同社会への適応能力であろう。ペーターは、「人間を批判的に皮肉ぼく眺め…」、かれは「人間と人間の関係にそっけなく、あてこすり…」(S. 404)、この社会的日常を支配する観念や規範への懐疑、そこから生じる人びとの意識と思考方法、及びさまざまな習俗への不信がペーターにはある。かれをとりまく社会的現実が差し出す参入の為の前提を人間の歴史が産み育てた成果として、ある程度の普遍性を有したものとは想えず、共同社会への参入と適応が求める条項をペーターは不自由と抱束としか感じられない、都市チューリッヒ、バーゼルに象徴される現実社会と個としての人間ペーターを繋ぐ橋梁がまだ架けられていない。世間と呼ばれる人びとの暮らしの営み方、そこでの文化と名づけられる生と思考の様式のうちにペーターの社会的存在を意味づける契機をヘッセはまだ与えようとしなない。人間の現実社会はニミコンの自然のような、全体を構成する各部分に統一と連関のある有機的でダイナミックな世界とはみなされず、世間の仕組みに馴染めずにいる若者が衣固地に悩んでいる。ただ、リヒャルトがペーターのユング的な意味での「影」であるとするなら、自照と内省を経た後の溺死はペーターの、そしてヘッセの自己実現の歩みということかもしれない。

## 5

「ペーター・カーメンツォント」は詩人に憧憬れた男の物語でもある。学生ペーターは熱心に古いイタリアの小説家や歴史研究に取り組む、ここでかれはアッシジの聖フランシスコとも巡り逢う。リヒャルトの奨めもあって、文体の訓練にと書いた文学や歴史に関するエッセイがきっかけで作家として収入を得るようになる。このペーターの職業的文筆活動は雑誌や新聞の文芸欄を埋めるためのものであって、まだ詩でも文学作品でもない。因に、「演劇批

評は検閲下の新聞紙面ではもっとも好まれて読れた欄であり、1860年から、70年にかけて演劇批評家という専門職業が成立している<sup>67)</sup>という。殊にベルリンでは1872年以後20年劇評家として活躍するフォンターネと周辺の批評家が演劇活動を支え発展させる。それは劇評家を中心とする会員制の演劇団体「自由舞台」であり、ドイツに新しい演劇の誕生をもたらすハウプトマンの「日の出前」の公演などである。「文芸批評のもつ社会的影響力が、たんなる文学にかぎらず、政治、倫理、さらに宗教意識の変革を誘発する力をもち始めた<sup>68)</sup>」のも世紀の転換を目前にした時代の趨勢であった。

しかし、ペーターは自分の文芸批評に時代の潮流を変える原動力があるなどと思ひもよらない。雑文であり、糊口をしのぐ方便でしかない、批評用の献本は即座に飲食の肩代りとなる。ペーターは写実主義や自然主義を、殊更に名指して批判するわけではなく、ただどれもが「ひきつったような流行のスタイル」(S. 391)のつまらぬものばかりだとされている。

ペーターは「憧憬と生命の大きく奔放な歌」(S. 392)を模索する若者である。かれはギムナジウムでの、字句や文言など些事に拘泥する知的準備作業の背後に「混じりけのない精神的なもの、精緻で正確な、真実を教えるものを予想し、そのなかに歴史の曖昧なもつれ、民族の争い、そして個々の魂に於ける不安な問題…」(S. 361)が解き明されると想っていた。更に、ゲーテ、シラー、シェークスピアを通じて、「…我々の相克を孕んだ、制御し難いところの不思議、世界の歴史の奥底の実体、そして、我々の短い人生の日々を輝くものにするこの精神の巨大な驚異、そして認識の力によって我々のささやかな存在を必然性と永遠なるものの域にまで高揚させること」(S. 364)を知った。かつて自然のなかで体感した神の声が、この「混じりけのない精神的なもの」「精神」の裡にも在るというのだ。ここで言う「精神」とはある高次の心的機能である。しかし、それは人間の情動を神経の微かな

67) 上山安敏：『神話と科学』105頁。

68) 上山安敏：前掲書、107頁。



振動でかたづけける知的な、しかし無味乾燥な作業としての論理的、実証的な科学的認識ではない、むしろ直観的な感性的認識のことであろう。ペーターにとってこの「精神」の体现化が詩人である。世界を視つめる精神の眼差しは対象を種や属に分類することはしない、対象の個々の特殊性、独自性を認め、存在の個有性を疎外することはない。論理的、実証的態度は対象を分類し、分析し、一般化した枠組みのなかで、都合のよい部位を剥ぎとり、繋ぎ合わせて総称でしかない名を付与する。その所産として示される世界像は、精神にとっては仮構としか映らない。

ペーターには眼前に広がる「世界は、わたしが世界の宝の一つを発掘し、それを覆う偶然なものの低俗なもののヴェールを剥がし、発見されたものを詩人の力で滅亡から救い不朽のものとする」(S. 365)のを待っているように見える。「精神は人間の裡なる神的なものであり、精神こそが限りある人間存在を光で満す」寄拠である。ペーターは「この精神に帰依し、この精神の裡に将来の故郷を」<sup>89)</sup>視ようとする。そして、幼少年期に根づいた自然への偏愛が、かれに「まるで星も山も湖もその美しさを物言わぬ存在の苦悩を知ってくれて、言葉で表わしてくれる誰かに憧憬しているかのような」(S. 392)甘美で不安な想いを抱かせる。そして「この物言わぬ自然に文学のなかで言葉を与えることが、天職であるかのような」(S. 392)託宣が告げられる。自然がもたらす心象風景への、ペーターの尋常ではないのめり込みは、莫とした根源的な力へ向けた孤独で閉鎖的な礼拝と謝恩である。自覚的存在の衝動は予感されるが、天職の証としての文学作品の輪郭はまだ明確ではない。

## 6

カーメンツィントの物語は、しかるべき時間と空間のなかを澁なく展開せず、むしろ緩やかに継ぎ合わされた追憶の連なりであって、そこに自己照察

89) Hans Jürg Lüthi : Hermann Hesse. Natur und Geist, Verlag W. Kohlhammer. Stuttgart Berlin Köln, 1970, S. 14.

や自然描写そして社会批判が織り込まれている。<sup>(40)</sup>とりとめのない追憶は物語に説明されない閱歴の亀裂を生む。リヒャルトの死に人生を呪うペーターは「…次から次へと迷路を歩いては、あれこれ穢いものも視たし、そこへ顔をつつ込んだりもした。」(S.417)そして、マウルブロン<sup>(41)</sup>の神学校で、「車輪の下」に轢断されたヘッセが、あちこち彷徨い、「幼い頃の人間にとって極めて重要な記憶が結びつく」<sup>(42)</sup>バーゼルに還ってきたように、ペーターもバーゼルに辿り着く。二人の振り返ったバーゼルまでの半生と、それを埋めるエピソードはなぞられた自照と内省の堆積物ということだろう。そこでは希望と決意は同量の頓座と逡巡を宿していたし、途上での取得は等しく遺棄を必要とし、発見は背後に見損じを引摺っていたはずだ。

全集版では削除されているバリの印象には、快活さと純朴への偏愛が近代都市の空気に混る猥雑さに過剰に反応している。

「とりわけバリは身の毛をよだたせる所だった。芸術、政治、文学と娼婦の雑談以外には、また芸術家、作家、政治家と下卑た女ども以外には何ものなかった。芸術家は政治家同様に厚顔で虚栄心が強く、作家連中は更に厚顔で虚栄心に充ちていた。そして一番厚顔で虚栄心が強いのは女ども<sup>(43)</sup>だった。」

都市を何も視ていない、「15世紀ルネサンス期の生活を想い浮べる」ペーター、「現代生活を諷刺する」ペーターの視線は都市の生活者に向けられていない。「大都會の近代的傾向が、徒に誇張され…なんの専門知識も無しで世界的大都市は、恥知らずで墮落したバビロンに対するようなロマンティックな反資本主義的手法で殊更悪者に仕立てられている」<sup>(44)</sup>という反駁は、必ずしも不当な言いがかりではないだろう。個を覆い匿名化させる都市にあって、それでも他に逃げ場のない人びとの生の重みは、少くとも南国の陽光の

(40) Joseph Mileck : a. a. O., S. 36.

(41) Hugo Ball : a. a. O., S. 100.

(42) Hermann Hesse : Peter Camenzind. Fischer Verlag Berlin, 1904, S. 127.

(43) F. Böttger : a. a. O., S. 97.

下で営まれる人びとのそれと等しいはずである。まともに人間と向き合わないペーターには都市もまた人間の歴史的所産であり，そこにも古典文化の歴史と伝統の町と等価の生の営みがあることが視えていない。